第五講　商学部　近代化社会論

次の文を読んで、後の問いに答えよ。

明治から大正の前半にかけて、日本の知的社会の構造は単純であって、ひと握りのエリートと大多数の大衆に二分されるだけであった。もちろん、知的な階層性は経済的な階級性とは異なり、上下の差は漸層的なものであって、かなりの程度に主観的な要素によって作り出される。経済的な力とは違って、知的な優越性は個人の努力によって達成されやすいし、実際、日本の近代化の過程で知的なエリート、あるいはエリートだと自認する人間の数は着実に増えて来た。しかし、この過程を支配していたのはあくまでも二極対立的な価値観であり、一方にエリート、他方に大衆、いいかえれば「学界」と草の根層を対置する単純な社会の構図であった。

これにたいして、大正後期に始まった知識社会の急激な膨張、いいかえれば、知的な階層性の急速な曖昧（あいまい）化は、A<u>皮肉なことに</u>、知識人のあいだにかえって主観的な階層性の意識を増大した。本来、エリートとは定義上、選ばれた少数者のことであるから、その数が膨張することは［1］。そのさい膨張したエリート階層のなかに新たな区別の意識が芽ばえ、純粋なエリートとそれに準ずる人間を階層化しようとするのは、自然な心理の動きであろう。その結果、昭和初年の日本に現れたのは、エリートとそれに準ずる知的な中間階層、ならびに旧来の大衆層からなる、いわば三層構造を持った知的社会であった。

どんな場合にも、社会の階層的な区別は、区別によって下積みに置かれた側によってまず鋭く意識される。新たな階層化の出現を意識したのは、いうまでもなく［2］であり、それとともに急成長を見せた新聞、出版ジャーナリズムであった。一九一七年、ロシアに起った革命は、そのなかで活躍した反体制的な知識人、いわゆるインテリゲンチャの存在を世界に知らしめた。日本でもこの言葉が輸入され、やがてその短縮型「インテリ」が流行語になるにつれて、これは新しい知的な中間階層がみずからを同定し、呼びならわすための恰好（かっこう）の用語となった。昭和初期の知識社会は、主として学界に生きる専門研究者と、主としてジャーナリズムに拠るインテリのあいだで、しだいに目に見えるかたちで分裂を深めて行った。新興のインテリの複雑な自恃（じじ）の感情と学界人への反抗心は、昭和二年（一九二七年）七月の日付を持つ、「岩波文庫」の発刊の辞にじつにみごとに要約されている。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む。かつては民を愚昧ならしめるために学芸が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあった。今や知識と美とを特権階級の独占より奪い返すことはつねに進取的なる民衆の切実なる要求である。岩波文庫はこの要求に応じそれに励まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少数者の書斎と研究室とより解放して街頭にくまなく立たしめ民衆に伍せしめるであろう。

流行の社会主義用語をちりばめながら、ここで筆者が直接の敵としているのは、「少数者の書斎と研究室」である。はたして、知識と美が特権階級に独占されうるものかどうか疑わしいし、それが物質のように奪い返せるかどうかもっと疑わしいが、ともかく、この筆者の眼にある種の知識人が特権階級のように見えていたことは、確実である。

そして、さらに確実なことは、この特権階級が社会的にどういう地位にあるかは問わず、少なくとも主たる知識の源泉として、岩波文庫を必要としない人間だったということであろう。筆者の眼に映っていた階級対立は、したがって岩波文庫を必要とする人間としない人間、いいかえれば、岩波文庫を読む人間とそれを作る人間の対立であった。主たる知識の源泉を翻訳と校注と解説に求める人間と、逆にその翻訳や解説を自分の知識からあたえる人間の対立であった。もちろん最大のB皮肉は、この「発刊の辞」の筆者が表向きは知的な「民衆」の側に身を置きながら、じつは明らかに、岩波文庫を作ってそれを啓蒙する側に属していたという事実であろう。学界人とインテリの相違は、必ずしも客観的な能力や知識の量の違いではなく、知識人とは何かという自己認識の違い、ならびに知識を操作する態度の違いにもとづくものであった。

実際、筆者の反抗心は半ば近く正当だったのであって、この時代、意識のうえで、「少数者の書斎と研究室」を守るエリートがいたことは、事実であった。大学や高校に拠る学界人の大部分、少数の高踏な文学者や芸術家のなかには、C明治一代目の知識人の伝統に踏みとどまろうとする傾向が見られた。

彼らの心の拠りどころは、西洋の近代文化と東西の古典的教養であり、その誇りの根拠は、それらの文化に原典を通じて触れていることであった。彼らは一、二の外国語か、漢文、あるいは日本の古文に通暁し、多くの場合、当時はまだ珍しかった外国留学の機会を持っていた。彼ら自身は他人の翻訳に頼ることを軽蔑した。のみならず、大学の内部には一般にジャーナリズムにたいする軽侮の念が高まり、研究者相互のあいだでも、新聞や商業雑誌に執筆する同僚に微妙な反感が向けられるようになった。彼らの信じるものは時流を越えた真理であり、行動の規範は学問研究の求めるディシプリン（規律）であって、当然、その生活

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

態度は孤高の尊重に傾いた。彼らの大部分は政治に無関心であるか、あるいは現実政治を軽蔑するという意味で、きわめて観念的な反体制主義に与（くみ）していた。

しかし、D<u>皮肉なことに</u>、彼らはまさにこの点において、彼らの憧（あこが）れる明治一代目のエリートたちと違っていた。陸軍軍医総監の森鷗外、慶応大学塾頭の福沢諭吉、早稲田大学総長の大隈重信、東京美術学校長の岡倉天心など、一代目の知識人は現実の政治に触れることをはばからなかった。また、夏目漱石や内村鑑三や吉野作造のように、むしろジャーナリズムを重要な地盤としたエリートも多かった。そして、そのことと関連して、明治の先覚は多少とも専門を越えた総合的知識をめざしたが、昭和の学界人は、その信条において完全な専門家であった。近代化が学問を複雑化し、個人が総合的知識を持つことが難しくなったのも事実であるが、知識人がその状況を進んで利用したことも疑いない。大学という制度のなかの学者たちは、他人の専門に口を出すことを慇懃（いんぎん）に拒絶し、自分の専門に口を出す「素人」を露骨に軽蔑した。そうすることが、専門を基盤とする大学制度を守る道でもあったし、百科全書的な先輩と同時代の素人知識人にたいして、自己の立場を鮮明にする道でもあったからである。

（山崎正和（やまざきまさかず）『日本文化と個人主義』による）

問１　空欄［１］をうめるのに最も適当なものを、次のイ〜ホから選べ。

イ　エリートの主観的価値が客観化される
ロ　エリートの存在根拠そのものを危くする
ハ　エリートの階層性を無意味なものとする
ニ　エリートの大衆への影響力が強化される
ホ　エリートの存在価値をより確かなものにする

問２　空欄［２］をうめるのに最も適当な語句を、文中から抜き出して記せ。ただし、十字以内ひと続きのものである。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問３　傍線部Ｃでいう「伝統」とは何か。筆者の見解に即して、次のイ〜へから二つ選べ。

イ　孤高の尊重　　ロ　政治への無関心　　ハ　東西の古典的教養
ニ　外国留学の経験　　ホ　観念的な反体制主義　　ヘ　ジャーナリズムへの軽蔑

問４　傍線部Ａ・Ｂ・Ｄは、それぞれ何が「皮肉」なのか。最も適当なものを、次のイ〜トから選べ。

イ　保守を装った革新　　ロ　進歩と相反する退行　　ハ　目標とくい違う到達
ニ　見かけと矛盾する実質　　ホ　連帯が生み出した孤立　　ヘ　近代性に同居する前近代性
ト　状況とはうらはらな内面の動き

問５　本文の内容と一致しないものを、次のイ〜へから二つ選べ。

イ　ジャーナリズムの発達は、エリートとインテリとの階層的分化を促進した。
ロ　昭和初期のエリートの排他的態度は、自己の優越性を確保する手段であった。
ハ　日本の「インテリ」は、その発生から見ると、反体制的な態度を本質とする。
ニ　昭和期においても、すぐれた専門家は同時に啓蒙家であることを求められた。
ホ　昭和の学界人は、明治のエリートの広い知識や行動力と結果的には無縁であった。
ヘ　インテリは、少数者による知識の独占に反対するのが知識人であると認識していた。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第五講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　山崎正和＝やまざき　まさかず（一九三四〜）京都府生まれ、京都大学文学部哲学科美学美術史専攻卒。同大学院やイェール大学演劇学科で学ぶ。関西大学教授や大阪大学教授などを歴任。日本を代表する文芸批評家

●森　鷗外＝もり　おうがい（一八六二〜一九二二）本名は、森林太郎（もり　りんたろう）。島根県生まれ、東京大学医学部卒。作家でありつつ、陸軍軍医総監まで上りつめた。代表作『舞姫』『青年』『雁』『高瀬舟』

●夏目漱石＝なつめ　そうせき（一八六七〜一九一六）本名は、夏目金之助（なつめ　きんのすけ）。東京生まれ、東京大学英文科卒。東大英文科講師を経て、朝日新聞に入社。専属小説家となる

●福沢諭吉＝ふくざわ　ゆきち（一八三五〜一九〇一）慶應義塾の創設者。主著『学問のすすめ』『文明論之概略』

●大隈重信＝おおくま　しげのぶ（一八三八〜一九二二）早稲田大学の創設者

●岩波茂雄＝いわなみ　しげお（一八八一〜一九四六）長野県生まれ、東京帝国大学哲学科で学ぶ。岩波書店の創業者。社名の看板は、夏目漱石が書いたものとして有名

●内村鑑三＝うちむら　かんぞう（一八六一〜一九三〇）札幌農学校（北海道大学）卒。無教会派のキリスト教徒。欧米向けの日本紹介の著作として『代表的日本人』がある

●吉野作造＝よしの　さくぞう（一八七八〜一九三三）宮城県生まれ、東京大学政治学科卒。「民本主義」の思想家

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

語句

漸層的＝ぜんそうてき→きっちりと二極化するのではなくグラデーションのように淡い違いの階層になっている様子
自認＝じにん→自己認識・自分で認めること
自恃＝じじ→自分自身を頼みとするということ・プライド
愚昧＝ぐまい→おろかで物事の道理がわからないこと
堂宇＝どうう→建物・殿堂
進取＝しんしゅ→古い習慣にとらわれず、進んで新しいことに取り組もうとすること
伍する＝ごする→同等の位置に並ぶこと・肩を並べること
不朽＝ふきゅう→いつまでも価値を失わないこと
校注・校註＝こうちゅう→語句解説のこと
高踏的＝こうとうてき→俗世間を超越し、自らを気高く保つこと
通暁＝つうぎょう→ある物事に詳しいこと。すみずみまで知り尽くしていること。夜通しという意味もある
軽侮＝けいぶ→軽くみて馬鹿にすること
孤高＝ここう→一人だけまわりよりも気高く、高い理想や志を保つこと
観念的＝かんねんてき→具体性や現実性ではなく抽象的な思考をもつ様子
慇懃＝いんぎん→丁寧で礼儀正しいこと。慇懃無礼というと、一面で礼儀正しいようで、その実、横柄で相手を尊重していない様子を指す

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第五講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）社会の階ソウ分化が進む　①相　②層　③装　④騒　⑤草

（イ）社会のコウ図を描き出す　①航　②講　③侯　④構　⑤項

（ウ）知識社会がボウ張する　①傍　②膨　③暴　④謀　⑤冒

（エ）進シュ的な民衆の要求　①主　②種　③守　④取　⑤手

（オ）書物が知識の源センとなる　①泉　②線　③潜　④選　⑤遷

（カ）民衆をケイ蒙する活動　①径　②慶　③契　④敬　⑤啓

（キ）商業雑誌にシッ筆する　①質　②室　③漆　④湿　⑤執

（ク）コ高を尊重する態度　①個　②小　③古　④孤　⑤己

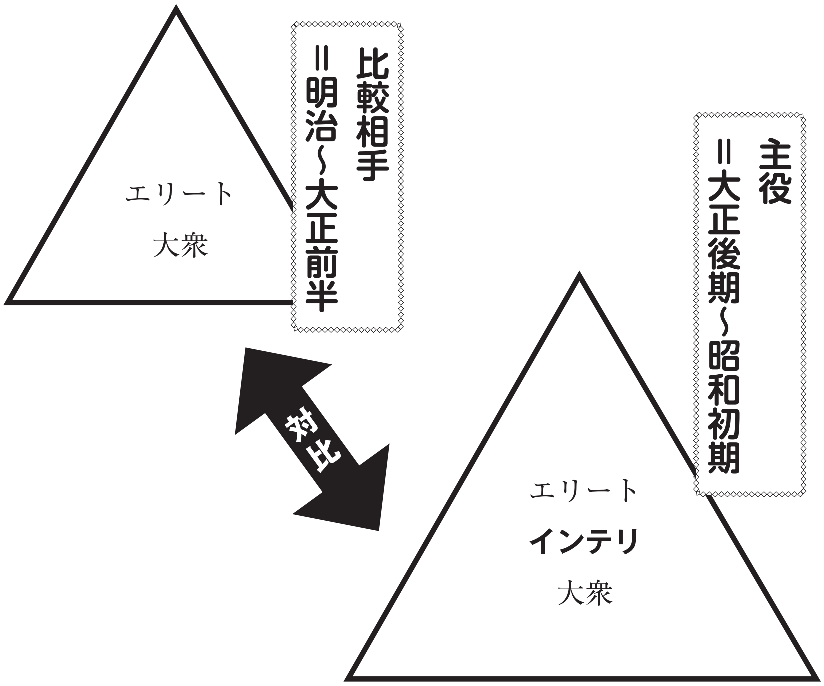
（ケ）学界人の信ジョウを守る　①上　②状　③条　④情　⑤丈

（コ）カン念的な反体制主義　①感　②観　③勘　④肝　⑤寛

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第五講　商学部　近代化社会論

《本文の対比構造》



明治一代目のエリート

専門を越えた総合的知識

現実の政治に触れる

⇕ **対比**

昭和のエリート

完全な専門家

政治に無関心

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問１《空欄補充・選択肢》

空欄直前に注目しよう。「本来、エリートとは定義上、選ばれた少数者のこと」です。したがって、「その数が膨張すること」は定義矛盾・語義矛盾になる、言葉の本来の意味に根本的に反することになる。したがって、ロの「エリートの存在根拠そのものを危くする」が正解です。

他の選択肢を吟味してみましょう。イは「客観化される」が×です。これでは目に見えるかのように確かなものになるということになり、正反対です。同様に、ホの「エリートの存在価値をより確かなものにする」もイケマセンね。ともに記述に反する誤りです。ニの「エリートの大衆への影響力が強化される」も似たような間違いです。エリートの定義上の危機なのに「影響力が強化」されるというようなポジティブなことにはなりません。ハの「エリートの階層性を無意味なものとする」はどうか。〝エリートの本来の意味に反する〟ならOKですが、「階層性を無意味にする」ではOKと言えません。階層も階層意識も残り続けますし、むしろ主観としてはむきになって自分たちはエリートだぞという意識が増すわけですから。「意味」という語に一瞬、心ひかれますが、「無意味」と〝本来の意味に反する〟でははっきり違いがあります。こういうところは、早稲田大学らしく、難しい選択肢になっています。

問２《空欄補充・抜き出し》

「いうまでもなく」という表現が付いていることから、この空欄より前に一度は書かれている語句が入るということがわかります。「エリート」「知的な中間階層」「旧来の大衆層」の三者の比較ですが、「大正後期」以降、新たに登場し区別が生じたのは「エリート」と「知的な中間階層」です。そのうち、「下積みに置かれた側」とは、まさに言うまでもなく「知的な中間階層」です。これが答え。

問３《傍線部説明・選択肢》

エリート・学界人と言っても「明治一代目」と「昭和の学界人」では、似て非なる重要な違いがあり、そこが対比されていま

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

す。わかりやすいとは言えない表記であるため、みなさんは難儀であったかもしれません。しかし、それでも区別は可能です。難易度が高まっても〝対比がわかったかな？〟と問うてくる点では、すべての現代文入試の本質と変わりありません。

では、どこで区別がつくか。直後の段落の「彼らの心の拠りどころは、西洋の近代文化と東西の古典的教養であり、その誇りの根拠は、それらの文化に原典を通じて触れていることであった。彼らは一、二の外国語か、漢文、あるいは日本の古文に通暁し、多くの場合、当時はまだ珍しかった外国留学の機会を持っていた。彼ら自身は他人の翻訳に頼ることを軽蔑した。」までが、「明治一代目のエリート」の伝統であり、「昭和の学界人」もそうあろうとしたモデルです。

ところが、「昭和の学界人」には、その先輩モデルとは異なる側面があります。それが「のみならず」以降の特徴です。「のみならず、大学の内部には一般にジャーナリズムにたいする軽侮の念が高まり、研究者相互のあいだでも、新聞や商業雑誌に執筆する同僚に微妙な反感が向けられるようになった。彼らの信じるものは時流を越えた真理であり、行動の規範は学問研究の求めるディシプリン（規律）であって、当然、その生活態度は孤高の尊重に傾いた。彼らの大部分は政治に無関心であるか、あるいは現実政治を軽蔑するという意味で、きわめて観念的な反体制主義に与していた。」の部分です。その後の段落に「彼らはまさにこの点において、彼らの憧れる明治一代目のエリートたちと違っていた」とあるのが、決定的なヒントです。

したがって、「伝統」にあてはまるのは、ハの「東西の古典的教養」とニの「外国留学の経験」です。その他は、すべて「昭和の学界人」の特徴ですから、対比混乱の誤りということになります。

問４《傍線部説明・選択肢》

A　「大正後期に始まった知識社会の急激な膨張、いいかえれば、知的な階層性の急速な曖昧化」という社会変化にたいして、生じた「皮肉」は、「知識人のあいだにかえって主観的な階層性の意識を増大した」ことです。社会の変化で、選ばれし少数者としてのエリートの在り方があやしくなると、「主観」「意識」レベル、つまり心の内面レベルで抗いたくなるということですね。したがって、トの「状況とはうらはらな内面の動き」が合致します。

B　「『発刊の辞』の筆者が表向きは知的な『民衆』の側に身を置きながら、じつは明らかに、岩波文庫を作ってそれを啓蒙す

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

る側に属していたという事実であろう」というのが、皮肉の内容です。「表向き」⟷「じつは」の対比、矛盾、皮肉は明らかですね。したがって、ニの「見かけと矛盾する実質」で決まりです。

D　「彼らはまさにこの点において、彼らの憧（あこが）れる明治一代目のエリートたちと違っていた」が皮肉の箇所ですが、「彼ら」とは、「昭和の学界人」のことです。問3でも解説したとおり、傍線直前の段落の前半は、「明治一代目のエリート」に倣った共通項目。後半が、その憧れのモデルとは異なる「昭和の学界人」の特徴でした。したがって、ハの「目標とくい違う到達」が正解となります。

問5《全文の理解・誤りの選択》

間違い探し二つというのは、早稲田大学商学部の伝統ですね。イについて、第三段落に「それ（新たな中間階層）とともに急成長を見せた新聞、出版ジャーナリズム」や「主としてジャーナリズムに拠るインテリのあいだで、しだいに目に見えるかたちで分裂を深めて行った」という記述がありますから、「ジャーナリズムの発達は、エリートとインテリとの階層的分化を促進した」とのイの書き方は妥当と言えます。

ロはどうか。「昭和初期のエリートの排他的態度」は、「ジャーナリズムにたいする軽侮の念」「政治に無関心」などと合致します。「自己の優越性を確保する」も知識層の膨張の際に、「純粋なエリートとそれに準ずる人間を階層化しようと」したことと合致します。最終行に「自己の立場を鮮明にする道」という表現もあります。

ハはどうか。「反体制的」は、ロシアの「インテリゲンチャ」の特性ですが、その言葉を輸入し短縮型にした、日本の「インテリ」には妥当しません。知識の「特権階級（エリート・少数者）」への「反抗心」ならOKですが、政治的な「革命」と結びつくような「反体制的」ではありません。なお、「観念的な反体制主義」という言葉が出てきますが、これも日本の「インテリ」ではなく、「昭和の学界人（エリート）」の在り方ですからね。したがって、間違い探しの答えの一つとしてこれを選びます。

ニはどうか。「昭和期」の「すぐれた専門家」は、「昭和の学界人」つまり昭和のエリートです。まず、「すぐれた専門家」という表記になっていますが、〝すぐれていない専門家⟷すぐれた専門家〟などという対比はありません。正しい対比喪失の誤

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

りです。さらに「専門家」が「啓蒙家（一般向けに教えを垂れてくれる人）であることを求められた」も本文の記述に一致しません。「求める」という表現について、本文にあるのは「主たる知識の源泉を翻訳と校注と解説に求める人間」とあるだけです。専門家にお願いして「同時に啓蒙家」になってくださいと求めているわけではありません。記述に反する誤りです。細かいことを言うと、岩波文庫「発刊の辞」を書いた岩波茂雄（いわなみしげお）さんは、啓蒙の役割を果たそうとしているのですが、広く「専門家」＝昭和のエリートがそういう役割を果たしたり求められたりはしていないのです。また、本文に「ジャーナリズムを重要な地盤としたエリートも多かった」とありますが、これは「明治一代目のエリート」の特徴であって、「昭和期」のエリートの特徴とは違います。この点からしても、対比混乱の誤りです。間違いの一つとして採用します。

ホはどうか。本文に「専門を越えた総合的知識」や「百科全書的な先輩」という表現がありますが、これらは「明治一代目のエリート」の特徴で、「昭和の学界人」はこれとは異なり「完全な専門家」でしたから、ホの「昭和の学界人は、明治のエリートの広い知識や行動力と結果的には無縁であった」は、妥当ということになります。

へはどうか。新興のインテリの学界人への反抗心は、岩波文庫の発刊の辞にしめされていました。したがって、「インテリは、少数者による知識の独占に反対するのが知識人であると認識していた」は妥当です。

模範解答

問１＝ロ　問２　知的な中間階層　問３＝ハ・ニ（順不同）　問４　A＝ト　B＝ニ　D＝ハ

問５＝ハ・ニ（順不同）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　解答　第五講

（ア）②
（イ）④
（ウ）②
（エ）④
（オ）①
（カ）⑤
（キ）⑤
（ク）④
（ケ）③
（コ）②

解答漢字一覧

（ア）階層
（イ）構図
（ウ）膨張
（エ）進取
（オ）源泉
（カ）啓蒙
（キ）執筆
（ク）孤高
（ケ）信条
（コ）観念

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。